

環境学習施設研究部会 報告

環境学習施設研究部会では、「環境学習施設のつくり方—地域に多面的価値を創出する施設—」をテーマに、5月26日（木）10時よりハイブリッド会場セミナーGで開催し、出演者等を含め43名（会場参加18名、ZOOM参加25名）の参加をいただいた。
 ※映像記録一覧（学会の本研究部会 HP）
<https://jsmcwm.or.jp/educational-facility/2022/06/01/kt2022/>

開催プログラム

1. 代表挨拶
2. 環境学習施設ハンドブック 進捗状況と予定
3. 施設運営を語りあう「運営組織の作り方～人材と育成」（コーディネイター花嶋温子代表）
4. 「TEAM EXPO 2025」参画と研究部会と学会入会のご案内 本研究部会事務局

冒頭の花嶋温子代表挨拶では、国際的な廃棄物の現状を示され、「答えは、現場にこそある」と、処理施設における啓発の重要性を指摘した。つぎに、主幹の山口氏（川崎重工業）より、現状のハンドブック制作進捗状況と今後の予定を説明された。

続いて、メインテーマ「運営組織の作り方～人材と育成」について、4施設のベテラン運営者が現場での実践について語られた。

最初は、多摩ニュータウン環境組合リサイクルセンターセンター長の江尻京子氏。NPO運営の立場や「モノとカネは工夫できるが、ヒトは工夫できない」と人材育成の重要性を述べられた。

- ♥ ヒト・モノ・カネ → モノとカネは工夫できるが、ヒトはできない
- ♥ ヒトに人が付くのであって施設に人が付くわけではない(特に地域施設)
- ♥ 環境学習施設に必要なヒトは、テーマ(ごみや環境)に対する好奇心と問題解決のための向上心を持ち、施設における自分の役割を理解して人に接することができるヒト

図1 江尻氏

2番手は、NPO法人豊中・伊丹環境政策フォ

ラム事務局長の小篠和之氏。地域が下支える運営組織のあり方を中心に、「環境学習推進会議」の役割と、地域一丸のボランティア活動について示された。

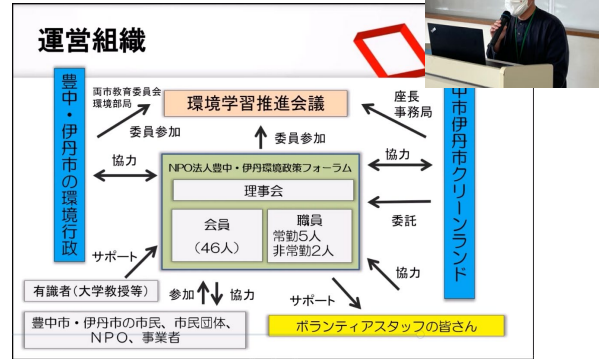


図2 小篠氏

続いて、豊田市環境学習施設エコット主任の長内隆久氏。エコット独自のボランティア制度「インタープリター」の育成について、多種多様なステージが必要という考えを述べられた。

図3 長内氏の説明

締めくくりは、札幌市リサイクルプラザ/NPO法人環境り・ふれんず代表理事の東飛郎氏。職員の安定した雇用、人件費の確保が課題であると指摘され、登壇者の共感も得た。

図4 東氏の説明

最後に、事務局から、「TEAM EXPO 2025」参画と本研究部会や学会入会をご案内し、研究討論会を締めくくった。

鈴木榮一（環境学習施設研究部会 事務局）